題字：石野 華鳳
（書家 小松市出身）

更生保護 小松能美

第8号
2020年（早春号）

更生保護制度施行七十周年記念事業

上映会「君の笑顔に会いたくて」

小松能美保護区の記念事業として、映画「君の笑顔に会いたくて」の上映会を開催しました。更生保護に携わる私たちの活動を知っていただくことを目的としました。

上映会は、十月十七日、十八日の両日、小松会場、能美会場で上映することとし、行政、更生保護女性会、保護司会で実施委員会を立ち上げて準備を始めました。配給会社との綿密な打ち合わせ、実施委員会での協議を重ね、小松市役所、能美市役所、川北町役場を訪ねて後援をお願いし、さらには教育委員会、社会福祉協議会の協賛を得て準備を進めました。

上映会は、小松会場にて昼夜二回上映し約三百名、能美会場では午前の上映で三百名を超える方に鑑賞していただくことができました。この事業では、更生保護女性会の皆様の協力には大きなものがあり、目標を達成することができました。

映画は、震災で息子をなくした主人公が、保護司として息子の同級生を立ち直らせる物語でした。家族の協力の下、一度は更生に向かった少年が再び罪を犯し、自分を見失ってしまうが、生きることを諭しながら更生させていく姿が描かれ、多くの方が感動しました。

見ていただいた方々に保護司の仕事、更生保護の重要性を十分理解していただけたことは確かであります。この映画を通じて多くの方々に更生保護活動を知っていただけたことは、上映会を開催したことが評価されたものと思っています。ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

石川県更生保護大会

令和元年十二月三日、石川県更生保護大会が、金沢市文化ホールにて県内から保護司、更生保護女性会員など更生保護関係者三百名余りが出席して開催されました。

午前中の記念講演では、社会福祉法人恩賜財団済生会理事長炭谷茂氏の「刑務所出所者を社会の一員に ～ソーシャルインクルージョンの視点から～」と題しての講演がありました。

午後からは顕彰式典があり、最初に全国大会で賜った「天皇陛下のおことば」を石川県保護司連合会の元山洋副会長が奉読されました。続いて、更生保護に功労のあった保護司、更生保護関係者に法務大臣表彰を始め全国保護司連盟理事長表彰など数々の更生保護関係の表彰及び感謝状の贈呈が行われました。最後に、本大会における大会宣言が発表され、採択されました。

更生保護制度施行七十周年にあたることから、十月七日には東京フォーラムで全国から五千名余りの保護司、更生保護関係者が出席して全国大会が開催されました。式典では、天皇陛下よりお言葉を賜り、その後、内閣総理大臣、関係閣僚などのあいさつがありました。

また、十一月六日には、岐阜市の長良川国際会議場で、五年に一度の中部更生保護大会が開催され、小松能美保護区からは佐野副会長他三名が参加しました。元山会長は、県連合会副会長の立場での出席となりました。

公開ケース研究会

―小松市立中海中学校―

公開ケース研究会も今年で四回目を迎え、今年度は中海中学校二年生六十二名と十四名の保護司が交流しました。

今回は最初から二クラスに分かれ、最初に保護司代表による趣旨説明、その後「二つの道」DVD視聴、各クラス五グループに分かれてグループディスカッションを行いました。生徒たちは、男女共に仲が良く、ほのぼのとした雰囲気の中で進められました。その後、グループ発表と保護司のまとめで終了しました。生徒の感想を掲載します。

●生徒の感想より

Aさん

保護司の方々とたくさん話ができて楽しかったです。グループの人たちとも交流ができました。「いじめ」について話したり「家族の事情」について話したりなど、いろんな話題で話すことができました。今回この「公開ケース研究会」をして、まず自分がつらく苦しんでも、一人で立ち上がることが大切だと学びました。そして、もし悩み事があったらためこまず、友達や家族の人にも相談して、心をスッキリできるようにしたいです。自分から自分の意見などをいう事ができるような人になりたいと思いました。とても楽しく、そして、いっぱい学ぶことができました。

Bさん

僕は犯罪予防教室を受けて、自分のしてしまったことは悪いけど、そこから家族がサポートして、子供の気持ちを聞いてあげないと、もっと悪い方向に行ってしまうことがあることが分かりました。いじめる人の一番身近にいる人が、その人の理解者になってあげなければいけないことが分かったので、友達の悩みや話をしっかり聞いてあげようと思いました。LINEでのいじめは見えないので、これからはLINEでいじめをしないように、また止められるようにしようと思いました。ビデオを見て、過去に罪を犯してしまっても人の接し方で変われる、という事が分かりました。

視察研修

●交野女子学院●

アーチ型の全寮制の女子校のような玄関が特徴的な白い門。ロッカーに貴重品と携帯を入れて写真は禁止でした。親子の面会室もあり、奥の会議室で院長の挨拶とスライドでのお話―院内見学―質疑応答という流れでした。

交野女子学院は現時点で十四歳（中二）から二十歳未満が収容されています。犯罪は、窃盗、傷害、覚せい剤と続くそうですが、十一ヶ月で卒院するそうです。教育課程は、生活指導、就職指導、高卒認定試験、大学進学教科指導、介護福祉や情報処理、フォークリフトの資格も習得できるそうです。院での食事は三食五百円。部屋は縦長の四人部屋でした。一人分のスペースはベットと洋服掛け、学校机と椅子が隙間なく配置されていました。服は下着から上着まで支給されたものを着ます。院内ではお花を植えたり、野菜を作ったりしているそうです。

充実しているようにも感じましたが、気になる事は、出所してからの多くの問題です。帰る場所がない。過ちを悔い改めても世間から白い目で見られる。中には児童施設に送られる場合があるそうです。出所したものの、きつい仕事をしながら差別されるより、刑務所で食事付き、仕事付きの生活がましだと、再犯で入り直す人もいるとのことです。

家庭環境による親からの暴力、精神疾患、いじめ、貧困、犯罪などどうやったら再犯防止になるのかと深く考えてしまいました。未成年者の安全な居場所確保、家族や社会のつながりを考える責任の自覚、本人の才能を発見し提供するなど、困りごとを相談できる場所があり、それぞれが連携して本人をサポートできることが再犯防止に繋がるということでしたが、あまりにも考えさせられて、答えることが難しい、心に残る研修でした。

自主研修会と新年懇親会

恒例の新年一泊研修が、一月十三日、粟津温泉「おびし荘」にて行われた。

幸円寺住職の幸村明氏を招き、「親鸞聖人に聞く」と題しての講演で、保護司をされていた幸村氏が、親鸞聖人の教えを拠り所に対象者と向き合った経験を熱く語っていただきました。

懇親会は保護司二十九名を含む四十四名が参加して、盛大に行われた。

はじめに今年度で退任された中野歌子さん、平野俊也さん、森林裕子さんに元山会長から謝辞と花束の贈呈があった。三人とも長い保護司活動の思い出がいっぱいで感極まって、言葉を選んでおられた。最後まで全うできた感謝を伝えられていたが、先輩あっての後輩、熱い思いを受け継いでいきたい。

来賓の井出能美市長の「君の笑顔に会いたくてという映画を皆さんと見て、保護司活動の奥深さに感動した」という言葉を重く受け止めたい。

酒を酌み交わすことは心を交わすこと、親交を深める機会になった。

伝統の「継承と進化」

チャリティ協力
伝統工芸士
糠川　孝之

家業が九谷絵付業をしていたこともあり、自然な流れでこの道に進んだのを記憶しています。

あれから二十年以上が経ち、今でも父と机を並べ、図案や配色など良い物を作るためのディスカッションを交え、日々制作に励んでおります。

従事当初から、九谷伝統画風である「吉田屋」「古九谷」「交趾」といった九谷焼で代表される表現技法を継承する一方、これまでにない九谷焼を発掘すべく、自身のオリジナル作品づくりにも尽力しています。伝統の「継承と進化」を両立することで、お互いの良い部分を発見し伸ばしていけるのではないかと考えています。

近年は「色を愉しむ」をテーマに作陶しています。九谷焼は華やかで煌びやかなイメージがありますが、その色に着目しこれまでの九谷にはない色作りや色調の研究を愉しんでいます。

時代の流れやライフスタイルの変化に伴い、人・物・考え方など多種多様になっている昨今、好きな言葉である「創意工夫」を制作理念とし、新時代への対応力に結び付けばと考えています。

定例研修 第二期

令和元年度第二期定例研修を九月二十四日午後一時三十分から寺井地区公民館で開催しました。依存症（応用編）をテーマに、講師の金沢保護観察所前田保護観察官から専門的な知識を学びました。

平成二十八年六月から刑の一部執行猶予が施行され、現在は四年目となります。保護観察付一部執行猶予で薬物乱用防止プログラムを開始した人員は年々増え続けており、今後も増加していく見込みです。仮釈放者に比べ、保護観察期間が長期にわたるため、保護司も薬物依存症について正しい知識を身につける必要があると話されました。対象者の気持ちに寄り添っていくことが大事と思いました。

グッドマナーキャンペーン

八月三十日から九月二十日までの登校時間、県の心の教育推進協議会主催の「グッドマナーキャンペーン」に賛同して、小松支部は中学校、能美支部は小中学校の校門に立って、挨拶運動と自転車の乗り方指導をした。こちらから挨拶すると子どもたちの表情も緩んできて、心が温かくなる。挨拶の大切さは社明作文にもよく書かれており、生徒会でも取り組んでいる。学校やほかの団体との情報交換にもなった。期間中、小松支部は二十九名、能美支部は八名の参加だった。

社会貢献活動

社会福祉法人あさひ会「ケアハウスファミール」

協力組織部会の社会貢献活動は、十月九日、小松市の社会福祉法人あさひ会「ケアハウスファミール」で行いました。

当日は天候も良く、外作業に最適の日でありました。作業内容は特別養護老人ホームの二階、三階、そして隣に建つグループホームの一階部分の窓拭きです。

対象者四名、保護司十六名、更女三名、前田観察官の計二十四名が参加しました。全員が揃ってから、担当箇所の割り振りを行い、作業を開始しました。この施設は海岸に近く、海側のガラス面は日本海からの潮風に打たれて塩分が少なからず付着している為、水を掛けて拭き取っても直ぐには綺麗にならず、皆さん大変苦労されたと思います。それでも皆さんの頑張りで、どの窓ガラスも見違えるほど綺麗になり、入所者もびっくりするほどで、無事終了することが出来ました。

終了後に会議室で施設長からお礼の言葉を受け、充実した日を過ごす事ができました。最後に参加者全員で集合写真を撮り解散しました。

社明作文コンテスト県連推薦

◆優秀賞　金沢保護観察所長賞

「明るい言葉」

小松市立芦城中学校二年　澤森　清孝

社会のなかではいろんな出来事が起きています。新聞やニュースを見たり聞いたりしていても僕の耳に一番深く聞こえるのは「子どもの心や体を傷つける記事やニュース」です。

僕は子どもが大好きです。先日中学校の職場体験に保育園を選びました。保育園で子ども達に触れ共に過ごせることを楽しみに向かいました。保育園では五歳児年長児のクラスで三日間過ごすことになりました。子ども達は、僕のそばに来て「おにいちゃん・せんせい」と呼び、その瞬間「かわいい」と心の底から思いました。五歳児になるといろんなことも話してきます。いろんなこともしようとします。そして僕の真似もしようとします。僕からの発信に興味や関心を持ち、どんなことでも聞いてきたり、一緒にしようともします。僕からの発信が子どもたちに何かを与えるのだと感じました。子ども達からも僕はいっぱいもらえたものがありました。「元気」「一緒に遊んでくれた喜び」「明るい笑顔」です。三日目には「せんせいまた来てくれたん。やったー」と本当にうれしそうに僕を見て歓迎してくれた瞬間は、「よし、今日もいっぱい遊んであげるぞ」と元気をもらい、喜びももらいました。

「子どもは社会の宝」と僕のおばあちゃんがよく話してくれていました。そして僕は、この三日間でも本当に感じました。素直で生き生きとして遊ぶ子供たちの姿から、半面、今よく聞かれる事件や事故、犯罪に巻き込まれ犠牲となる子ども達も少なくはありません。どうしてなんだろう、何故なんだろうと悲しい気持ちになります。犯罪に巻き込まれ犠牲になる子、そして小学校・中学校でも自ら「死」を選んでしまう子、肉親に「命」を奪われる子、本当にいろんな形で、子ども達の、あの笑顔が消えていく社会の構造に、今、僕ができることがあるのだろうかと考えます。

中学二年生を迎え、十四歳、先日も同じ年の子が友達とのトラブルの末、自ら命を絶ったというニュースが流れていました。僕も中学校に通っていますが、学校は楽しいと思えるし「行きたい」と毎日楽しみに通っています。でも時々感じるのは、言葉の大切さです。

言葉は時には、明るい灯でもあり、時には、鋭い刃物にもなります。そんな明暗を言葉は持っています。使い方で相手を傷つけたり、相手を励ましたりもします。小さな五歳の子ども達もその言葉に対して、学んでいました。僕も保育園に通っていたころ「ちくちくことば」「ふわふわことば」を先生から教えてもらったことを思い出します。ふわふわ言葉は、相手のことを明るくし、そして自分の心も明るくします。ちくちく言葉は、相手の心も傷つけ嫌な思いをさせてしまい、そのせいで自分も心が暗くなります。

保育園での体験の中で、楽しいふわふわ言葉が行き交い、楽しい時間が過ごせました。そんなことも思うと、小さな子が学んできたことを知らず知らずに忘れてしまい、自分よがりなことばかり考え行動し発してしまい、いつの間にか恐ろしい犯罪、自らの死までに追い込んでしまうほどのことが起きていることを感じました。

僕が今できる社会を明るくする運動の一つは、「ことば」。小さな頃を思い出すことができた職場体験、「ふわふわことば」を活かすことが僕が今できることだと思いました。十四歳になった僕が今できることは、言葉の大切さを持って自ら発信し、明るい言葉を使い交わすことだと思いました。

◆優秀賞　石川県ＢＢＳ連盟会長賞

小松市立御幸中学校一年　掛水　七海

「笑顔のループを絶やさずに」

◆優秀賞　特定非営利活動法人石川県就労支援事業者機構会長賞

川北町立川北中学校一年　伊藤　真琴

「明るい社会にするために」

◆優秀賞　北國新聞社社長賞

川北町立川北中学校一年　北田　優奈

「小さなことから」

退任に思う

新任保護司としての抱負

小松支部東分区　山本　直樹

平成三十一年十月に保護司を拝命しました小松支部東分区の山本と申します。私のような未熟者が、このような職を仰せつかい、大変恐縮しております。

私が、保護司をお引き受けしたのは、ご推薦していただいた方の期待に応えたいという思いと、もう一つは、身近な上司が保護司を務められていることが決め手の理由でした。上司は、常に周りの方を区別することなく同じ目線で対応されています。

現代は、LGBTや外国人など様々な方々が共生している多文化共生社会です。もちろん、罪を犯した方が、二度と罪を犯さないために、周りの方が暖かい気持ちで対応できる環境も必要と考えます。

これからは、諸先輩方のご指導をいただき一日も早く保護司として、社会の役に立てるように、頑張りますので宜しくお願いいたします。

心の宝

中野　歌子

昨年十月十九日付にて、保護司を定年退職いたしました。

平成七年十月二十日拝命間もなく、十一月には更生保護石川県大会が小松市を会場に行われ、右も左も分からぬまま先輩方々と共にお世話をさせて頂いた事が思い出されます。

各種研修会や、社会を明るくする運動、社会貢献活動、記念誌作成、機関誌作成他、微力ながらも様々な活動を通して、ご指導、ご支援を頂けました事は、私の人生にとって大きな力となり、掛替えの無い心の宝となっております。それに加えて、二十五件の担当を無事終える事が出来ましたのも、只々多くの皆様方のご指導、サポートあればこそと、深く感謝申し上げます。

わが子を思う親の姿、そして親を慕う子の姿を根底に見つめながらの二十四年間、本当にありがとうございました。

最後になりますが、皆様方の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げ挨拶といたします。

新任保護司

小松支部東分区　越田　雅之

二十余年、多くのことを学ばせていただきました

平野　俊也

平成十一年、職場が変わり、それを機会に上司、先輩保護司より「ボランティアとして保護司をできないか」と勧められました。私にとって思ってもいないことだったので、「保護司って、何するの？」と、問いかけた思いが残っています。

あれから二十余年、様々な研修会に学び、先輩保護司に学び、問いかけ、保護観察官の指導を受け、まさに別世界の日々が続きました。自分の日常の本務に少しは関係しているとはいえ、あくまで本務外の世界だったからです。

平成十七年、所属の保護司会も変わりました。能美支部保護司会から小松能美保護区と大きくなり、行政的（内容・運営面は引継ぎが多いが）に互いの交流、会議や事務面の交流も多くなったようです。

この間、人間的な面で随分悩んだこともありましたが、今思えば多くの心の財産をいただき、蓄えることができました。その財産とは年齢・性別問わず、多くの人との心のふれあいです。

各保護司が係わる対象者との懇談内容、懇談場所等に苦慮することも多く、保護司事務所は大きな位置をしめるようになってきました。一方では進路や職業紹介等でも多くの方のアドバイスも受け、心温まる思いも多くあります。勿論、裏切り、叱咤激励、思わぬ感激等様々です。悲しいこともありました。一人一人の決意・思いを大事にしてほしい。そして自分を!!

私も保護司の一員として多くの事を学ばせていただきました。大事な心の財産として大切にしていきたいと思います。ありがとうございました。

令和元年度 石川県更生保護功労者顕彰式典表彰者

●法務大臣表彰
近藤 悦子・谷　京子・長崎 智子
根上 康平・日野 晁子・平野 俊也

●全国保護司連盟理事長表彰
石田 直樹・上村 英一・山本 敏明

●石川県知事感謝状　宮本 紀美

●社会を明るくする運動石川県推進委員会委員長感謝状（チャリティ作家）
村中 暁美

●中部地方更生保護委員会委員長表彰
林　伸一・宮川 信之

●中部地方更生保護委員会委員長感謝状（チャリティ作家）　都賀田久馬

●中部地方保護司連盟会長表彰　林 いづみ

●中部地方保護司連盟会長表彰（家族功労者）　佐野外茂子

●金沢保護観察所長表彰　南　裕子

●金沢保護観察所長感謝状　宮本 紀美

●金沢保護観察所長感謝状（チャリティ作家）　福田 樹峰

●石川県保護司会連合会会長表彰
梅田 利和・柿原　勧・南　知子

小松支部だより

小松支部は四十四名が東・南・中・北の四つの分区に分かれており、それぞれ分区会を開いて保護司会活動の情報交換をしている。その中で、事業や研修への出席率が上がらない、保護司のなり手が見つからない、この二つが課題となっている。

特にここ二年間に十一人の分区員のうち四人が退任した東分区は、分区長を中心に危機感を持ち、個人の働きかけや本人からの申し出もあり、三人の新任保護司を迎えることができた。年二回の分区会で保護司活動の体験を話したりして、新任保護司とのつながりを深めている。

まだ保護区の定数には七名不足しており、保護司の発掘に力を入れなければならない。

能美支部だより

昨年の六月に森林裕子さん、十月に平野俊也さんが退任されました。長年、保護司として更生保護活動に尽力されたお二人のご労苦に答えるため、十二月三日に感謝の会を辰口温泉「まつさき」で開催しました。能美支部全員が参加し、思い出話で楽しいひと時を過ごすことができました。

また、能美支部で毎年発行の機関誌「能美更生保護」第四十七号を十二月二十日に発行することができました。更生保護制度施行七十周年にあたることから「記念号」とし、能美市長、川北町長からのご寄稿もいただき、充実した内容となりました。保護司、更生保護女性会の方々の行事や活動を通じて感じたことやかかわった思いなどが文章に綴られています。

この機関誌は、行政、教育委員会、学校関係、更生保護関係者などへ広く配布し、読んでいただくことで、更生保護への関心を高め、私たちの活動を理解いただければと思っています。今後も、能美支部の重要な活動として続けていきます。

教育現場からの声

〝安中プライド〟

小松市立安宅中学校
校長　荒木　達人

安宅中学校の生徒たちは『安中プライド』である「丁寧な挨拶・無言清掃・思いやり」を大切に取り組んでいます。生徒たちは、来校されたお客様や先生方に、立ち止まり一礼をし、爽やかに挨拶をしています。掃除は学年の枠をこえた縦割による無言清掃です。全員で雑巾による水拭きをしながら、無言で一日の自分の行動の振り返りを行っています。

「安宅中学校の自慢は何ですか」と生徒に聞くと全ての生徒が「挨拶」「清掃」と答えるくらい、生徒たちは自分たちの行動に誇りを持っています。まさに『安中プライド』です。「安宅中学校の生徒の挨拶は本当に素敵である。地域も元気が出る」と地域の方からの声もあります。

一人一人の生徒の成長は、集団による高まりが大切であると感じています。今後も『安中プライド』を大切にし、一人一人の生徒の確実な成長を目指して取り組んでいきたいと考えています。

編集後記

新年早々からの新型コロナウイルス感染症の拡大、不安な日々が続いています。一日も早い終息を願うばかりです。

今号も多くの方から貴重なご寄稿をいただきました。保護区の活動が着実に進んでいるのがうかがえます。ご協力ありがとうございました。

広報部会長　新川　賢

小松能美保護区保護観察件数等／2月1日現在の増減比較数

単位（件）

種別	1号	2号	3号	4号	環境調整
	家庭裁判所で保護観察処分を受けた者	少年院から仮退院を許された者	刑務所から仮出所を許された者	刑事裁判所で刑の執行を猶予され保護観察に付された者	保護観察前に要する、身元引受人及び帰住環境の適否調査と調整作業
平成31年	10	0	3	8	12
令和２年	5	4	1	9	14
増　減	−5	4	−2	1	2

最近の保護観察件数の動向

保護観察等、全体の件数は昨年並みである。
しかし、この数字には表れていないが、依存症等の処遇困難者や刑の一部執行猶予者も増加している。

※お問い合わせ 事務局
TEL0761-46-5105　FAX0761-46-5108
E-mail hogoshikai@aqua.plala.or.jp
URL http://hogoshikai.org

発行日　令和2年3月1日
発　行　小松能美保護区保護司会 広報部会
印　刷　マルト株式会社